くらしかた・すまいかた
Vol.23

TWIN HOUSE for SINGLE

都市にミドリを。

東京某所。閑静な住宅地の坂道の途中にあるその家の庭は豊かな緑で覆われ、
段差のついた小路が緩やかに蛇行しながら玄関まで続いています。
一見するとふつうの緑ですが、実はこの庭の緑にはふつうとは違う秘密があります。
今回は金網を使った緑化システムの先駆けである株式会社ゴバイミドリの宮田さんから、
その誕生のきっかけになったご自宅のくらしかた・すまいかたについて、お話を伺いました。

取材・編集：㈱地球工作所 Earth Planning & Work.inc
取材協力：宮田生美さん（株式会社ゴバイミドリ代表取締役）　写真提供：（P1~6）宮田さん、（P7）株式会社ゴバイミドリ

社員に家を持たせよう

編集部：この家に住むことになったきっかけを教えてください。
宮田さん（以下敬称略）：私が勤めていた会社で「社員持ち家制度」ができ、その関係でこの家に住むことになりました。
編集部：「社員持ち家制度」とはどんなものですか。
宮田：その会社では街づくりの仕事をしていて、自分たちの住まいくらい自分たちで考えようと。その代わり、家を建てる土地も設計を依頼する建築家も全部自分で探してこないといけなくて。私はそのために宅建の資格までとりました。
編集部：宅建ってそんなに簡単にとれない資格ですよね。
宮田：自分で勉強しただけでは絶対に無理だと思ったので、会社にお願いして学費を出してもらい、資格取得の学校に通わせてもらってなんとかとりました。
会社は土地利用のコンサルティングも手掛けていたので、社員に家を持たせようというプロジェクトも新しい住宅ビジネスを模索する意味も兼ねた取り組みでした。だから全く関係ないとは言えないのですが、この件がなければとらなかったでしょうね。
土地探しから含めるとこの家が完成するまで実は６年もかかっているんですよ。
編集部：６年！
宮田：土地探しに４年、設計をお願いしてから家が完成するまで２年程かかりました。

４年かかった土地探し

宮田：私は愛媛の出身で、地元の新聞社に勤めていた時は松山のアパートで一人暮らしをしていました。その後、転職を機に上京して、27 歳から東京に暮らし始めました。土地を探したのはずいぶん後になってからですが、そんな私が土地を探すとなれば、住んだことのあるまちや住んでみたいまちの不動産を探しますよね。最初はおしゃれな渋谷区や目黒区に憧れましたが、世の中そんなに甘くありません。
高くて買えないので、本当にたくさんの土地を見ました。最後の方にはうんざりするくらい。
編集部：ここに決めたのはどういった経緯なのでしょうか。
宮田：ある日、他の不動産を見たついでに「大田区に良い土地があります」と言われて。私はあまり乗り気ではなかったのですが、「とりあえず」ということで社長も一緒にこの土地を見にきました。社長にはこの土地のポテンシャルが理解できたのだと思います。最終的には私を説得にかかってきました。社長曰く「君は東京の土地勘があまりないから、この土地の良さがわからないと思うけど、ここは昔から文人も多く住んでいる住宅地だし、掘り出しものだと思うよ。」とかなんとか（笑）。この土地は旗竿地ですし、まわりは四方住宅に囲まれていたので、私としてはなぜ社長が強く勧めるのかわからなかったのですが、家が建った今ならわかります。
編集部：社長が推した理由は何だったのでしょうか。
宮田：この家の２階は私の家ですが、１階は会社が人に貸しています。この土地の良さは坂道の途中に建っているため、隣よりも１段宅地が高いこと。四方を住宅に囲ま

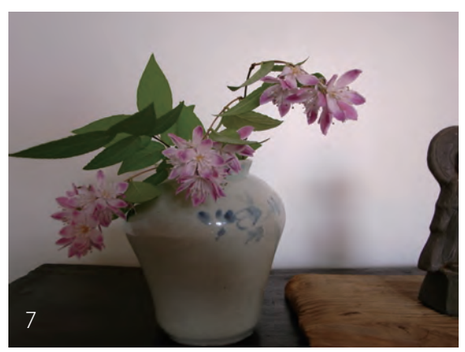
5. 竣工から３年後の庭。竣工前の様子が想像できないほど豊かな緑に覆われている。四季折々に草木が色づき、花が咲き、日々のうるおいをもたらしてくれる。6. テイカカヅラは常緑のツル植物。日向でも日陰でも良く育ち、葉が小さいため育っても扱いに困ることが少ない。7. 珍しい紅色のウツギ。庭の花を飾るので、宮田さんは生花を買わなくなったそう。8. 庭の中には新築祝いとして贈られたジューンベリーも。そのまま食べたり、ヨーグルトと混ぜて飲んだり、気ままに庭からの恵みを楽しんでいる。

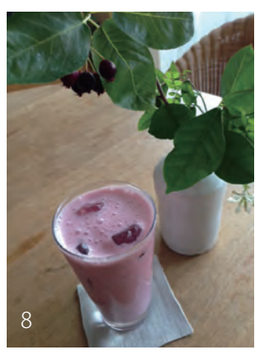
れた敷地でも、２階部分を自宅にすれば眺望も期待できるし、両隣には立派な庭もあるので、それを借景して良い住まいにできるのではと確信したからでしょうね。社長は時間帯を変えて何度もこの土地を下見して、確信したようです。
編集部：さすがですね。土地の次は設計者ですか。
宮田：家の設計は建築家の永田昌民（ながた まさひと）さん※1にお願いしました。永田さんの作品集を拝見して、ぜひ自分の家もお願いしたいと思い、手紙を書きました。永田さんほどの建築家だと、ただお願いしただけでは請けてもらえないだろうと考えたからです。幸いなことに設計していただけることになりました。

シンプルで美しい永田昌民さんの家

編集部：永田さんにはどう言って設計をお願いしたのでしょうか。
宮田：一応社内ではそれぞれの家にコンセプトを設けていて、私の家には「ひとり暮らしのための居心地のよい１LDK の住まい」というものがありました。永田さんにはそれをお伝えして、まあ「しゃらくせえ」と思ったかもしれないんですが（笑）。
編集部：広い感じがしますけど、１LDK なんですか。
宮田：そこが永田さんのすごさでしょうね。基本的にこの家にはトイレと浴室以外に扉がないので、一部屋ということになるんで

1. 庭の竣工前。コンクリートで地面が覆われ、奥に階段があることがわかる。また隣地境界に設けた木の壁は隣の家の緑を庭の緑として取り込めるよう高さを抑えてある。02. 竣工後。田瀬さんの設計によって表情のある庭に仕上がった。施工期間は３日間。3. 山本さんに言われるまま、何かの苗を植える宮田さん。4.「何か」の球根。





すが、暮らしていると、そんな風には感じないのです。
編集部：敷地の四方を住宅に囲まれているとも思えません。
宮田：そうですね。その点もとても思い切りがよくて、見せたくない方向の壁は閉じて、窓などをいっさい開けてありません。でも借景や空が抜けて見える部分には、天井いっぱいまの大きな窓を設けているので、実際の面積よりも部屋が広く感じます。
永田さんの家は余計な線がないんですよ。見えている建具は全て木ですし、アルミの窓は格子で上手に隠しています。
編集部：壁は漆喰でしょうか。
宮田：ペンキです。設計が進みだんだんお金もなくなってきて、永田さんに「床と壁、どっちにお金をかけますか。」と聞かれて。悩みましたが、私は床を選んだので壁はペンキになりました（笑）。
編集部：ペンキでもなぜかとても上質な感じがしますね。
宮田：ありがとうございます。自分の思い描く理想の家を設計できるのは誰かと考えて、永田さんしかいないと確信した自分の判断は間違いではありませんでした。
これはどんなことにでも共通して言えると思うのですが、誰に仕事を頼むかで、その成否は８～９割決まっているんじゃないかと。
編集部：それが肝心ですか。
宮田：「プロだからその位はできるでしょ。」「誰に頼んでも大体同じでしょ。」と思っていたらダメです。自分が理想とするものがあるなら、それを実現できる人にお願いしないといけないですね。だから永田さんに設計を請けていただけたことは本当に幸運でした。

田瀬理夫さんによる立体的な庭

編集部：この家の庭も素敵ですね。
宮田：ありがとうございます。この庭は田瀬理夫さん※2の設計によるものです。年賀状に「この家の庭の設計がしたいです。」と書いてあって、私も田瀬さんに設計していただけるならこんなありがたいことはないと思い、「ぜひ！」と即答して実現しました。
編集部：どうして田瀬さんはそうおっしゃったのでしょう。
宮田：当時、田瀬さんが手掛けるのは大きな案件ばかりで、一度個人庭の設計をやってみたかったようです。それで「好きに設計してください！」とお願いしたら、本当にまったく相談されることがないまま設計が終わっていました。
編集部：どういう庭にしたいとかいうことも ...。
宮田：一度もなかったですね（笑）。そして植栽は造園家の山本紀久さん※3がいろんな植物を持ってきて、同じように家主である私に何の相談もなく、好きな植物を好きなように植えていきました（笑）。
編集部：家主なのに（笑）。
宮田:そうですよ（笑）。「新築祝いだから」って。それ以降は毎年、山本さんが責任を持って庭の手入れに来てくれます。作業の後は、手伝ってくれた皆で、我が家でご飯を食べて行くのが恒例になりました。
編集部：写真（P3/ 写真 1）を拝見すると竣工前の庭はコンクリートで覆われているんですね。
宮田：不動産屋が整地して売り出していた土地で、元々、旗竿地の竿の部分が舗装されていました。入口に近い方が平らで、一番奥に７～８段の階段があり、家のエントランスに入っていく形だったんです。それを田瀬さんが金網と人工土壌と緑を使って今のような庭にしたんです。田瀬さんの手にかかると高低差を活かした立体的な庭がいとも簡単にできるのです！何もなかったコンクリート舗装の上に、３日後には庭ができていたのでとても驚きました。(P3/ 写真 2、P4/ 写真 5) この経験から、田瀬さんのこの緑化システムを他の場所でも活かせないかと考えるようになりました。

まちに緑を増やすためのシステム

編集部：宮田さんは「５×緑（ゴバイミドリ）」という緑化システムを展開していますが、それはご自宅の庭づくりから発展したんですね。
宮田:そうです。私なんて職業柄、緑の専門家ともお付き合いがあったし、ふつうの人よりもずっと緑に近い場所にいたと思うのですが、そんな私でも自邸の庭をどうやってつくったらいいのか分からず、途方に暮れたのが正直なところです。さらにそれがプレーンでニュートラルなデザインのものと考えた時、それにこたえてくれるものはありませんでした。そんな私の悩みを解決してくれたのが田瀬さんでした。
編集部：それからすぐに製品化されたのでしょうか。
宮田：すぐにということではなかったですね。ただしばらくして先述の社長から当時の社員全員に自主プロジェクトの立ち上げを促されたこともあって、何か新しい事業をやるにしても、どこか社会に役立つことがしたいなと。まちに緑が増えることは良いことだし、そうしたいと思うけれど、私と同じようにどうしていいか分からなくて困っている人は案外たくさんいるんじゃないかと思ったんです。
それともう一つ大きなきっかけがあって、私の友人が病気で亡くなったんですが、彼女の病室の窓から見えていたのが隣のビルの壁で、人としてこんなところで死んでいくのはあんまりじゃないかと強い衝撃をうけたんですね。その時の経験が「東京にもっと緑が増えてほしい。」と強く願うきっかけになっています。
そして東京が変わるためには大きな面だけではなく、個も大切ですよね。
編集部：「個」とは個人の庭ということでしょうか。
宮田：そうです。田瀬さんの緑化方法をシステム化できれば、色んな人が使えるようになって、個人の庭という小さな緑の点が増えるんじゃないか、だからその緑化方法をシステム化して提供する事業を考えました。それが「５×緑」の原点です。
編集部：当初は個人をターゲットにされていたのですね。
宮田：そうです。始めた当初は全くの異業種だったので、私たちもまずどこに情報を提供していくべきなのか分からなくて。ただビックサイト等の大きな会場でやる建材展に出すようなものとも違うということだけはハッキリしていました。
そこで自分たちの得意な分野で情報を提供していこうと考えて、まずは設計やデザインをやっている人に向けて、自分たちだけの展示会を開くことにしました。そんなに広い会場ではないのですが、全て金網を使ったユニットで緑化して、商品のブランディングをして名前も決めました。それが「５×緑（ゴバイミドリ）」です。
編集部：なぜ「５倍」なのですか。
宮田：展示会用に田瀬さんが 50cm 角くらいの緑化キューブをつくってくれました。サイコロの展開図のようになっていて、通常であれば１面しかできない緑化でも、このシステムを使うことで５面（上面＋横４面）、つまり今までの平面的な緑化に対し５倍の面積の緑化ができるという、このシステムの特性を表したものでした。それで「５×緑（ゴバイミドリ）」と名付けました。
編集部：なるほど。素晴らしいネーミングですね。
宮田：ありがとうございます。展示会は 260 人以上の方に来ていただけて大成功に終わったのですが、結果としては意外な方向に進んでいくことになりました。
私たちはプライベート・プロジェクトとして小さな案件を少しずつ、なんて考えていたのですが、実際にはもっと大きな案件を手掛ける設計者の方にコンタクトしていたようで、ある日「この金網に緑が植わっているのはお宅の商品か？」という電話をもらって驚きました。
編集部：設計の人ではなかったんですか。
宮田：ゼネコンさんからの問い合わせの電話でした。展示会に来てくださった設計者の方たちは、個人庭ではなく、商業施設やマンション等、もっと規模の大きい案件を手掛ける人が多かったようで、これは本当に予想外の展開でした。

都市に、もっと緑を。

宮田：５×緑は 2003 年から 2004 年にかけて立ち上げました。最初は社内の一つの事業でしたが、それから 10 年以上経って独立もし、今、大きな方向転換をしようと考えています。
編集部：具体的に教えていただけますか。
宮田：原点にかえる、ということかもしれません。まず５×緑が大切にしたい理念をを共有できる仕事に出逢っていきたい。そのためにパンフレットを新しくしました。またイベント「５×緑（ゴバイミドリ）の学校」を通じて、田瀬さんの設計を若い設計者に伝えていく活動も行っています。
田瀬さんの凄みはコンセプトから、それを実現するためのディティールまで一貫して表現する術をもっているところです。必要であれば実測大の図面を書いてきます。「５×緑の学校」では、そういった田瀬さんの設計手法について、１回の講義で１プロジェクトだけ、約２時間半の時間を使って丁寧に解説しています。
編集部：金網を使った緑化システムは、この 10 年の間にだいぶ増えたと思うのですが、その点についてはどうお考えでしょうか。
宮田：そうですね、まず金網のユニットを使った緑化手法のオリジンは田瀬さんだということを、知っていて使っている人は少ないと思います。それから姿形が５×緑と似ている製品はとても多いと思いますが、全くの別物です。

9~12. 毎年恒例の剪定作業の様子。みんな楽しげに緑と向きあう。作業終了後のご飯も楽しみのひとつ。

例えば金網ひとつとっても、5 ×緑で使っているものの耐久年数は50 年以上のスペックがありますし、植えている緑の質も違います。私たちは里山の森を守る意味も兼ねて、できる限り里山の森で育てた緑の苗を使っています。農薬ももちろん使っていません。また基本的には在来種の樹種で構成するため、苗木の生産地についても潜在植生を意識しています。具体的に言うと関東の苗は関西等他の地域では使わうことを原則としています。

編集部：徹底していますね。

宮田：自主的にルールを定めています。もちろん 100％ルール通りにいかないこともありますが。

確かに緑が増えるのは良いことですが、ただ緑が植わっていれば良いということではなく、それがどこの森から誰の手を渡ってきて、これから 50 年先まで建物と共にまちの中でどう育っていくのか、そういった一連のプロセスをひとつずつ大切にしたいと考えています。

編集部：新しい展開としては他にどんなことがありますか。

宮田：5 ×緑 Standard works（ゴバイミドリ・スタンダード・ワークス）というラインナップを新しく加えました。5 ×緑は基本的にオーダーメイドの緑化システムだったのですが、私たちがこれまでのプロジェクトを通して蓄積してきたデザインの中から、汎用性の高いものを選び、ディテールを洗練し、標準化しました。製品の図面や価格を出来るだけご提供し、設計者やデザイナーの方が自ら計画に組み込むことが容易になったと思います。

編集部：緑化フェンスもあるんですね。

宮田：特に密集している都市部の住宅地では、隣地との境界線の緑化がとても重要だと考えています。狭い住宅地でも緑化フェンスで隣の建物が見えないようにできたら、家の中からの景色が緑で覆われます。窓から見える眺めの中に緑が増えることで、暮らしている人の気持ちももっと豊かなものになると思うんです。

それに緑の管理が大変だというお話をよくされるんですが、庭の手入れは暮らしの中の楽しみのひとつでもあると思うんですよね。

編集部：確かに。最後に宮田さんが暮らしの中でいちばんくつろげるのはどんな時か教えてください。

宮田：なんでしょうね。天窓から入ってきた光がロフトへ続く壁にゆらめいているのを「きれいだなあ」とぼんやりと眺めたり、ソファに座っていて吹いてくる風の暖かさに気づいたり、庭に咲いている花に気づいたりする時ですかね。そんなに大きなことじゃないんですけど（笑）。

でも日常の幸せは、なんてことのないことに宿るのではないかと思います。

編集部：本日は貴重なお話をありがとうございました。（終）

[注釈]

※１．永田昌民：シンプルで居心地のよい住宅を数多く手掛けた建築家。著書「大きな暮らしができる小さな家（共著:杉本薫､オーエス出版）」では、必要なものがあれば家は小さくてもよいこと。また空間と時間の関係として、「一日の変化、四季の変化、経年の変化、それぞれの変化をちゃんと受けとめて設計したい。（中略）そんな結果の積み重ねが、いつかは日本の住まいのスタンダードになればいいと思っています。」と語っている。惜しくも 2013 年に永眠。

※２．田瀬理夫：日本を代表する造園家。株式会社プランタゴ代表。5 ×緑の全ての商品、全ての設計には、田瀬氏の蓄積したデザインが生かされている。代表作にアクロス福岡、ＩＶＹ ＳＴＲＵＣＴＵＲＥ、アクアマリンふくしま、読売広告社、赤坂ガーデンシティー、日産先進技術開発センターほか。

※３．山本紀久：造園家。株式会社愛植物設計事務所・代表取締役会長。「風土を表す植物とそれに密接にかかわる生物を含めた「生命体」に関する知見を基軸に《本質》を極めるための実地主義を重視したランドスケープを行う。日本造園学会賞、建設大臣表彰、黄綬褒章、第 27 回 北村賞ほか、多くの受賞歴を持つ。

5 ×緑についての詳細は <http://www.5baimidori.com/>